汚れた天使

三好 徹「天使」全作品 6

三好 徹

講談社文庫

汚れた天使　三好 徹「天使」全作品 6
三好 徹
昭和53年 2 月15日第 1 刷発行
昭和53年 7 月 3 日第 2 刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京 (03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　　版　豊国オフセット株式会社
印　　刷　豊国オフセット株式会社
製　　本　株式会社千曲堂
© Toru Miyoshi 1978
Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

汚れた天使

三好 徹「天使」全作品 6

講談社

目次

汚れた天使　五
虚ろな天使　三九
いかさま天使　八一
罪ある天使　一三五
悲しき天使　一六五
幻の天使　二二五
天使の馬　二五五
解説　権田萬治　二九一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

汚れた天使

1

横須賀の駅を降りたとき、墨絵のような夕闇がひろがりはじめていた。タクシー乗り場には、かなり長い人の列ができている。それが予想外で、私は思わず軽い舌打ちをした。本来なら、とっくに宿直あけのからだを休めるために、自分の部屋に帰っているところであった。いや、私のことだから、伊勢佐木町かいわいの馴染のバーへ行っているかもしれない。いずれにしても、私は損な役を引き受けさせられたのだ。寒風に吹きさらされてタクシーを待たねばならぬこと自体、あたかもそれを実証するようにも思える。

私は歩きだした。すぐに左側の視界がひらけ、どろんとした鉛色の海面が見えた。港には、何隻かの軍艦が繋留されていた。日章旗を掲げたそれに比べ、星条旗をひるがえしたそれは、型も大きく堂々としていた。その光景は、十年ほど前の駈け出し時代に在勤したころと、ほとんど変わりないように見えた。行きかう人波に米兵や自衛隊員が目立つことも、街なかの看板に英語の多いことも同じだった。変わったものといえば、たぶん私だけであろう。十年たてば、人間はいやでも変わる。

タイヤと路面の激しい摩擦音が、そのとき鋭く空気を引き裂いた。

通りの向こうがわに、トラックと乗用車が止まっていた。二台の車の間に、赤くけばけばしい

ものが落ちていた。トラックから降り立った年若の運転手が、両手で頭をかかえこむようにして、赤い物体の横に立ちすくんでいた。

すぐに人だかりがしはじめた。私は歩調をかえずに歩み寄り、人垣をかきわけた。

倒れているのが女であることは、瞬時にして了解し得た。運転手は顔をかくすようにして泣き声を放っていた。人々は眼をそむけていた。私はのぞきこんだ。乗用車にはねられた瞬間、対面から走ってきた積荷――それは鉄管だったが――にひっかけられたらしく、腹部が真一文字に切り裂かれていた。いうまでもなく、轢かれた女は完全にコト切れていた。その切れ目の間から、皮膚の色の違う胎児がのぞき見えた。

私は人垣を離れた。約十分ほどで、勤めている新聞社の通信部に着いた。

主任の宮崎は、机にむかって鉛筆を走らせていたが、私が入って行くと、年寄りじみた微笑をうかべた。

「やあ、ご苦労さん、支局長から連絡があったんでね、待っていたんだよ」

とかれは、その微笑に似つかわしいものやわらかな口調でいった。

私はコートを椅子の上に投げ置いた。そのはずみで、椅子の上にあった夕刊が床の上に散った。宮崎は腰をかがめて拾った。ていねいに折りたたんで机の上に置き直す。べつに怒っているふうではなかった。そういう性格なのであろう。私はいった。

「いま、そこで事故があったよ。轢かれたのはオンリーらしかったな」

「名前やなんかは？」

「取材はしなかった。だいたい、きょうは明け番の日なんだ」

「そうだってね。交通事故なら、あとで警察回りの伊能君から入るだろう」
伊能記者は見習だった。ほかにもう一人、羽根という若い記者が横須賀通信部に在勤している。羽根は、私の出た学校の後輩で、横浜から訪問してきた目的も、かれにあるのだった。宮崎はそれを察したように、
「羽根君はいま三崎の方へ取材に行っているんだ。七時ごろまでには帰ると思うが、ちょっと外へ出ようか」
私はうなずいた。宮崎は、ドアごしに細君にむかって別人のような張りのある声でどなり、それから衣裳かけの上衣を着こんで先に立った。
連れて行かれたところは、かなり広い、そして飾り立ててはいるが、その安っぽさがいたずらに目につくような喫茶店だった。壁には、横文字の値段表が貼ってあった。コーヒーが二百円だった。宮崎は、私の視線を追ってから、かれ自身が経営者であるかのように恐縮していった。
「その値段は、アメさん向けなんだ。本当はその半値だよ」
ウェイトレスが近寄ってきた。あすからでも街の女を開業できそうなその女に、私はコーヒーを頼んだ。宮崎もそれに同調した。そして、
「どうも参ったよ、羽根君の一件には」
といった。
かれは、着てきた上衣のようにくたびれた表情をたたえていた。私が答えずにいると、程なく運ばれてきたコーヒーをアスピリンでも飲むように口にふくみ、
「支局長は、ぼくの監督不行届というようなことを、いっていなかっただろうね？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とたずねた。
私は、支局長の岡原の顔を想いうかべた。
使いものにならなくなった社会部の古手が年の功で横浜支局長になっているのだ。かれがどう考えていようが少しも惧れることはないのだが、宮崎には宮崎の立場があるであろう。私はいった。
「あんたの監督不行届になるはずがないさ。羽根は、仕事の上でミスしたわけじゃないんだから。われわれの私生活の面を、とやかくいう方がおかしいんだよ」
「理屈はそのとおりだけれど、なにしろ、相手の女がねえ」
私が支局長に聞かされた話によると、羽根はバーのホステスにぞっこん惚れこみ、給料を前借りしてまで入れ揚げているということだった。だから学校の先輩で、羽根がなついている私が行って意見してこいというのである。私は、そんな役はご免だ、といってやった。男がどんな女を愛そうが、十六、七のヒヨッコじゃあるまいし、余人の口出しすべき問題じゃない。
すると岡原は、それでなくとも分別くさい顔をいっそう分別くさくして、
「バーのホステスだからいかんというわけではない。それが米兵専用のバーで、しかも札つきの莫連女なんだ。何度も売春で挙げられているし、やくざのヒモもついているということだ」
「年は？」
「二十一、二らしい」
「金のことでどこかに迷惑をかけているんですか、羽根は？」
「そこまではいっていないが、しかし、カメラなどは、質屋に入っているそうだ。通信部の記者

がカメラを持っていないようでは、いざというときに困るからな」
「なるほど、莫連女にね」
私は意味のない相槌をうった。意味のないことはわかっていたが、ほかに適当な言葉もなかった。
しかし、私は羽根に意見したり訓戒をたれるために、横須賀まで出向いてきたわけではなかった。そんな高尚なことをいうガラでもなかった。当の私に意見したいと思っているやつが何人もいるはずだった。
私は、羽根と話し合って、相談にのるつもりだった。きのうのニュースは、あくまでもきのうのニュースであり、あすもまたニュースになるとは限らない。私たちはそういう生き方をしてきた。その女が娼婦だったとしても、あすも娼婦であるとはいえない。警官ならば前科者は妻にできぬという内規があるが、それだって本当は憲法違反なのだ。
だが、宮崎には、私の気持ちがわからないようだった。あんたが意見してくれれば、かれも目を醒ますだろう、と低い声でぼそぼそいった。私は時計を見た。羽根が帰るまでに、一時間以上もあった。
「宮崎さん、その女の働いているバーは？」
「プリンセスというんだよ。そこでアンジェラと名乗っているそうだが、本名までは知らないんだ。会ってみるかい？」
うなずき、テーブルの上の伝票をつかんで、私は立ち上がった。宮崎が払うといいはったが、むろん応じなかった。

それからレジのところで、試みに四百円出してみた。レジの女は当然のようにそれを受けとった。ありがとうございます、とひどく愛想のない言葉をいったのが、せめてもの慰めだった。

2

その通りの左右には、無数のネオンが寒ざむとした光を明滅させていた。ベニヤ板でつくられた等身大の女が、あられもないポーズで生身の人間を誘惑しようとしているのだが、全身にまとったペンキが色あせているので、なにかしらおかしみさえ感じさせる。場末の映画館のウィンドウじみたガラスケースのなかに、半裸の女の写真がべたべた貼られていなければ、子供でも気やすく入れただろう。

約百メートルは続いているそのバー街の中ほどで、宮崎は足をとめた。私はかれを誘ったが、まだ原稿が残っているといって、宮崎は私を置き去りにした。

店の前には、二人の男が両手をズボンのポケットにさし入れて、立っていた。背が丸まっている。爺むさい感じをあたえたが、顔は二十歳を出たばかりの若者だった。かれらは、刺すような眼差しで私を見つめた。私はそれを振りはらって、なかへ入った。

かなり広い店だが、米兵の数は、思いのほかに少なかった。客席に坐っているものよりも、踊り場で女を抱いている方が多かった。女たちは、音楽とはおかまいなしに腰を振っていたが、それは、踊っていてはドリンクがとれないための苛立ちのように見えた。

私は、あきらかに、場違いの客だった。集注してきた視線がそれを物語っていた。私は、スタンドの端のスツールに腰を下ろした。

あぶれていた女の一人が、のろのろした足どりで近寄ってき、隣のスツールに坐った。たぶん三十は越しているだろう。もし、じっさいの年齢がそれより若いとすれば、荒淫か過飲か、あるいは麻薬かがそのからだを蝕んでいるせいだ。

「ここは、外人だけなんだよ、お客さん」と彼女は嗄れた声でいった。

「そうかい。しかし、日本人が入っちゃいけないとは、どこにも書いてなかったな」

「あんた、よその人？」

「頭がいいね。看破ったご褒美に、ご馳走しようじゃないか」

私は、バーテンに水割りを、彼女にジンフィズをたのんだ。バーテンはアメリカ式に現金を要求した。私は一万円札で払った。女の眼が、私の釣銭の行方をとらえて離さなかった。

「きみの名は？」

「メリーよ、ここだけの名前だけどね」

メリーは、ジンフィズをジュースでも飲むように一息に飲んだ。いや、ジンなどは入っていないから、ジュースを飲んだのだろう。このぶんでは、私の一万円札の残りは、いくらも経たぬうちに、居場所を変えるにちがいない。

水割りを飲みながらそれとなく様子をうかがうと、視線の集中砲火は、大はばに減っていた。ホステスの数は、約五十人だった。姫君という名前をつけた経営者は、たぶん人生の哀しみを解する人物に相違ない。私はメリーにいった。

「お仲間は、全部で何人だい？」

「七十人くらいかしら。でも、きょうは、船が入ったから、二十人くらい休んでいるわ」

私は、ポケットから千円札をつかみ出し、メリーの前に置いた。
「これを進呈しよう」
「だれに？　あたしに？」
「おれの眼には、きみしか見えないが……」
千円札は、あっという間に、メリーの乳房の間に姿を消した。
「どうしてほしいの？」
「アンジェラというホステスを、呼んできてくれないか」
「きょうは休みらしいわ」
「病気かな？」
「さあ」
「アンジェラの家を知らないか？」
「知らないわね」
「マネジャーはどこにいる？」
「七時にならないと、こないわよ」
「アンジェラと仲のいい人でもかまわない。呼んできてくれないか」
「あんた、なにしにきたの？　なにしてる人？」
私は、バーテンに合図して呼び寄せた。マネジャーは来ていないかという質問に対するかれの返答は、メリーと同じだった。
私はスツールを滑り下りた。

出口までもうあと数歩というところで、私は呼び止められた。呼び止めた男は、私とほぼ同じ年配の男だった。背丈は私よりも低かったが、黒っぽい服の下に蔵されている肉体は、私よりもはるかに強靱なものを秘めているように見てとれた。

男は無表情な眼で、私の全身をなめまわした。冷たいものが、私の内側にしのびこんできた。私はまず右足に力を入れ、さらに左足にも力を入れようとした。どちらも、成功しなかった。かすかな慄えが、静かに這い上ってくるのを意識した。

「なにか用かい？」

と私は問いかえした。思いのほか、平静な声を保ち得たのが、ささやかな自己満足となった。

「お客さんは、アンジェラに会いたいそうですが、どんなご用で？」

男の口調は、昔ふうのやくざといった感じを私にあたえた。衣紋掛を肩に入れたようなチンピラにはない落ち着きと、それからぶきみな冷静さがあった。

「会って、聞きたいことがあるんだ」

「とおっしゃると？」

「あんたはここのマネジャーか？」

「マネジャーじゃないんですが」

「用心棒らしいな」

男の眼に、刃物のような残忍な光が走ったが、思い直して自制したようだった。無理に白い歯をみせ、

「ずいぶん、思い切ったことを……。わたしだからいいようなもんだが」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com